明治初期日本政府蒐集建築関連洋書からみた 洋風建築の導入過程に関する研究

学位論文内容の要旨

明治初期における西洋建築の導入過程において、雇い外国人の指導や、日本人大工棟梁による居留地の建築の参照などが、これまで多く報告ならびに検証されてきた。一部の研究者はその導入過程の一つとして建築洋書の影響の可能性を指摘しながらも、それを実証できず、このことが歴史の中に埋もれてしまった経緯がある。しかし実際には、開拓使、工部省、大蔵省、文部省など、明治新政府の諸官庁とその管掌機関において、多くの建築関連洋書が明治初期に蒐集されていたことを、各機関作成の洋書目録から窺うことができる。

本研究は、明治初期洋風建築導入過程において、舶載洋書、とりわけ米国出版のパターンブックが、無視することのできない大きな役割を担っていたことを、実証的に解明するものである。

そこで本研究では、上に示した各種洋書目録を基礎資料に、太政類典、公文録、開拓使関連簿書などにより補完しつつ、明治初期日本政府諸官庁が蒐集した建築関連洋書の全容の把握を試みるとともに、その購求意図、蒐集の状況ならびに移管の経緯を明らかにしている。また、「建築の洋風化がより徹底して進行した」と言われる開拓使を対象に、意匠、技術の両面から建築関連洋書の参照の実態について考察した。

本論文は、序、第1～4章、跋により構成される。

序において、まず、研究対象の舶載洋書を蒐集した年代範囲を、明治初年から、中央官庁営繕に関わる制度や組織が大きな転換期を迎える明治10年代後半までを目処に定め、明治初期洋風建築と舶載建築洋書に関わる以下の4点について既往研究を俯瞰し、問題点を整理した。i) 洋風建築の導入過程で「アメリカ風」と言われてきたものが、アメリカ人によるものではなく日本人建築技術者林忠恕の設計による中央官衙であると一様に指していること、および、菊池重郎と遠藤明久が洋風建築の導入過程の一端として舶載洋書の可能性を指摘していたこと、ii) 明治初期洋風建築全般を「擬洋風建築」と総称するようになった過程を示すとともに、多くの研究者が「擬洋風」と表現し難い事例があるとし、特に、林忠恕設計の開成学校学校(1873年)など、米国人研究者がその中にパターンブック掲載のモチーフを認めていること、iii) 現在、一般にパターンブックの翻訳語として用いる「雛形」は、明治初期には *pattern* ではなく、*design* の意味であったこと、iv) パターンブックの研究は、アメリカで近年盛んになりつつあり、それを日本に紹介する例はあるが、パターンブックそのものが日本の建築に影響を与えたという研究視点が欠落していること、を示した。

第1章では、北海道大学附属図書館閉架書庫、同札幌農学校文庫、室蘭工業大学附属図書館土木専門文庫、函館市中央図書館に分散する開拓使旧蔵の建築関連洋書を全冊閲覧し、開拓使および札幌農学校関連簿書を基礎資料に、各書籍に残る蔵書印、図書票簽、整理番号などから、その購入および移管経緯を考察した。開拓使による洋書の購入は1872年3月のケブロンによる洋書購入の申し立てまで遡り、翌年正月には開拓使五等出仕大鳥圭介が外遊先のロンドンで建築洋書を購入した。1875年には東京芝増上寺境内にあった開拓使仮学校から札幌へ書籍を運送した。また、初期購入書中の米国出版のパターンブックを含む建築関連書は、1871年末に、雇い外国人アンチセルが提出した北海道術科大学校を設立すべき意見書に関連する可能性を指摘した。これに加え、開拓使工業局、開拓使煤田開採掘事務係の蔵書目録を新たに発見し、その全貌を明らかにした。また、1878年に駐露公使榎本武揚が、露国式丸太小屋の導入を目論んでいた開拓長官黒田清隆のために

持ち込んだ書籍を特定したとともに、従来不明であった開拓使少書記官鈴木大亮がウラジオストクに出張した際、同港営繕局長より寄贈を受けた13点の建築書類のうち8点を、北海道大学附属図書館北方資料室において発見したことを示した。

第2章では、開拓使旧蔵建築関連洋書のうち、特に米国出版のパターンブックに着目し、開拓使洋風建築の意匠とパターンブック掲載図版を比較し、具体的な事例を示しながら、開拓使営繕技術者がパターンブックを媒体として西洋建築を修得し、初期洋風建築を完成させた過程を考察した。Woodward, National architect. 1869には、開拓使本庁分局庁舎(1873年)にほぼ一致する図版が掲載され、Cummings and Miller, Architecture. 1868にも、開拓使本庁附属舎(1873年)や勅奏邸(1873年)などの破風飾りと同一の図版を確認した。他にも窓額縁や階段など、パターンブックの図版をそのまま引用した事例を多数確認した。開拓使工業局庁舎(1877年)では、様々なパターンブックに掲載の図版を組み合わせ一つの建築を構成したことを明らかにした。

第3章では、札幌農学校初代教頭クラークが1877年の離札に際し札幌農学校へ寄贈した図書に着目し、バルーンフレームと米国式家畜房がクラーク船載の図書を参考に導入された過程を考察した。クラークにより札幌農学校に導入された米国式家畜房は、ダンにより1878年に真駒内牧牛場に、1870年に米国に留学した湯地定基により、1878年に七重勸業試験場にも導入された。東京麻生井町の東京第三官園でも、家畜の生育不良の打開のため1881年に米国式家畜房を建設したことを明らかにした。札幌農学校と真駒内牧牛場では、揚水風車を導入していた。前者はクラーク船載洋書を、後者は米国の揚水風車パンフレットを参考に建設された。同時期、上野公園で開催の内国勸業博覧会でも、米国で購入した図面を元に作成した揚水風車が出品されている。近代文明導入過程の明治初期日本において、同時代的に、かつ同時発生的に米国を範とする技術導入を模索した証の一つといえる。

第4章では、国立公文書館所蔵の太政官文庫旧蔵建築関連洋書、工部大学校創設期の所蔵建築洋書、東京書籍館、教育博物館を淵源とする国立国会図書館所蔵の建築関連洋書の全貌を明らかにした。まず、太政官による洋書目録蒐集から各省庁蔵書の一括管理、そして蔵書目録の作成までの過程を太政類典、公文録などの公文書により明らかにした。また現存図書を全冊閲覧し、蔵書印と図書票簽、整理番号から、購求ならびに移管経緯を考察した。太政官文庫のうち大蔵省旧蔵書は1873年以前に蒐集された米国出版のパターンブックを含む。また、1872年に翻訳出版された『西洋家作雛形』の原著を大蔵省旧蔵書に発見した。工部大学校旧蔵洋書は、1876年、1878年、1880年にそれぞれ編纂された洋書目録から建築関連図書を抽出し、現存する図書との比定を試みた。工部省からの移管が確認された3冊は全てパターンブックで、うち2冊は米国出版であった。工学寮印のある図書にも米国のパターンブックが目立つ。工学寮旧蔵書は、予科学、専門学、実地学のカリキュラムに従った基本的な図書が目立ち、コンドル着任以後はより専門性の高い図書とともに、英国のパターンブックや図版の豊富な雑誌を取り揃えていた。現存図書を見ると、特に古典的オーダーの図版ページは、尋常ではないほどに汚れ、破損し、頻繁に捲られた跡を窺える。国立国会図書館所蔵の文部省旧蔵書は、後に教育函として分類される学校建築関連書と、一般の閲覧に供するために購求された建築入門書である。後者は工部大学校旧蔵書との類似が指摘できる。

跋において、明治初期に日本政府諸官庁が蒐集した建築関連洋書中には、米国出版のパターンブックが共通して目立ち、開拓使における参照を敷衍して、大蔵省、工部省など明治初期に中央官庁の営繕業務を管掌した組織においてもパターンブックの図版を参考に建築を構成した可能性を指摘した。即ち、こうした様式的規範であるパターンブックを参考とした洋風建築を「擬洋風建築」と呼ぶことはできない。さらに、明治初期の「雛形」が持つ design の意味を、現代の独創的 original あるいは創造的 creative 意味ではなく、当時の西洋諸国における折衷主義的意味合いから、様式の選択ならびに細部意匠の断片化と再構成として捉え、co-ordinate と考えることが妥当であると論じた。これは、19世紀後半という時代において、洋の東西を問わず同時代的な傾向であり、こうした背景、営繕技術者の高い技術があったからこそ、西洋の建築様式、技術の移植、融合が可能であったのである。

学位論文審査の要旨

主 査 教 授 角 幸 博
副 査 教 授 小 林 英 嗣
副 査 教 授 佐 藤 馨 一
副 査 教 授 杉 山 滋 郎 (大学院理学研究院)
副 査 准教授 小 澤 丈 夫

学位論文題名

明治初期日本政府蒐集建築関連洋書からみた 洋風建築の導入過程に関する研究

明治初期における西洋建築の導入過程において、お雇い外国人の指導や日本人大工棟梁による居留地建築の参照などが、これまでに多く報告、検証されてきた。本論文は、これらに加え、舶載洋書とりわけ米国出版のパターンブックが担った役割を実証的に解明し、明治新政府が蒐集した建築関連洋書の全容の把握を試みるとともに、購求意図、蒐集、移管の経緯および開拓使を対象に、意匠、技術両面から建築関連洋書の参照の様子を明らかにしたものである。

本論文は、序、第1～4章、跋から構成され、序では、明治初期洋風建築と舶載建築洋書に関する諸問題について既往研究を俯瞰し、整理している。洋風建築の導入過程で「アメリカ風」と言われるものは全て日本人設計の中央官衙であり、先行研究で洋風建築の導入に舶載洋書の影響があると指摘するものや、一部の米国人研究者がパターンブック掲載のモチーフを認めているものの、国内外における研究でパターンブックが日本の建築に影響を与えたという研究視点が欠落していることを指摘している。第1章では、北海道内図書館に分散する開拓使旧蔵の建築関連洋書を全冊閲覧し、開拓使および札幌農学校関連簿書を基礎資料に、各書籍の蔵書印、図書票籤、整理番号などから、その購入および移管経緯を考察し、また初期購入書中の建築関連書は、アンチセルが1871年末提出の北海道術科大学校を設立すべき意見書に関連する可能性を指摘している。これに加え、開拓使工業局、開拓使煤田開採掘事務係の蔵書目録を新たに発見し、その全貌を明らかにしている。

第2章では、開拓使旧蔵建築関連洋書のうち米国出版パターンブックに着目し、開拓使洋風建築の意匠とパターンブック掲載図版を比較し、具体例を示しながら、開拓使営繕技術者がパターンブックを媒体として西洋建築を修得し、初期洋風建築を完成させた過程を考察している。Woodward, *National architect*. 1869に開拓使本庁分局庁舎(1873年)に一致する図版が掲載されていることや、開拓使本庁附属舎(1873年)や勅奏邸(1873年)などの破風飾りと同一の図版をCummings and Miller, *Architecture*. 1868に確認し、開拓使工業局庁舎(1877年)では、様々なパターンブックに掲載の図版を組み合わせて一つの建築を構成していることを指摘している。第3章では、札幌農学校初代教頭クラークが1877年寄贈の図書に着目し、バルーンフレームと米国式家

畜房がクラーク舶載書を参考に導入され、真駒内、七重、東京官園にまで波及した過程を考察した。また、札幌農学校と真駒内牧牛場で建設された揚水風車に着目し、前者はクラーク舶載洋書を、後者は米国の揚水風車パンフレットを参考に建設されていることを明らかにしている。同時期上野公園で開催の内国勸業博覧会でも、米国での購入図面を元に作成された揚水風車が出品され、明治初期日本において、同時代的かつ同時発生的に米国を範とする技術導入が模索された証の一つであることを示した。

第4章では、国立公文書館所蔵太政官文庫旧蔵建築関連洋書、工部大学校創設期所蔵建築洋書、国立国会図書館所蔵建築関連洋書の全貌を明らかにし、購求ならびに移管経緯を考察している。1873年まで中央官庁営繕を管掌していた大蔵省旧蔵書には、米国出版のパターンブックが多く含まれることや、工部大学校(前身の工学寮含む)編纂の洋書目録と、現存図書との比定を試み、工部省からの移管が確認された3冊全てがパターンブックで、うち2冊は米国出版であること、工学寮印図書にも米国のパターンブックが目立つことを示している。跋では、明治初期に日本政府諸官庁が蒐集した建築関連洋書には、米国出版のパターンブックが共通して目立ち、開拓使における参照を敷衍して、大蔵省、工部省など明治初期に中央官庁の営繕業務を管掌した組織においてもパターンブックの図版を参考に建築を構成した可能性を指摘し、この図版が「アメリカ風」の淵源であると論じている。

これを要するに、著者は開拓使旧蔵および明治初期中央官庁の建築洋書の購入移管経緯を初めて詳細に明らかにし、開拓使洋風建築の意匠とパターンブック掲載図版の比較検討から、開拓使営繕技術者がパターンブックを媒体として西洋建築を修得し、初期洋風建築を完成させた過程を実証的に解明するなど、近代建築史研究に新知見を得たものであり、建築史学、建築意匠学に貢献するところ大なるものがある。よって筆者は、北海道大学博士(工学)の学位を授与される資格あるものと認める。